

# 地域探究や地域連携をベースにした高等学校 「探究的な学習」入門

## ～新潟県阿賀町・新潟大学との連携を事例として～

「産業社会と人間」委員会 栗飯原匡伸・渋木陽介・中井 毅・塚原康介  
後藤卷子・浅野理就・高畑啓一・古家幸瑛

近年、地域をテーマとした探究活動の実践報告が賑やかであり、それらには共通した条件がいくつかみられる。この条件は、地域と学校とが連携して、効果的な探究活動を実現するための条件として捉えることができる。都市部やその近隣の高校は、この条件を満たしにくく、効果的な地域探究を実現することが難しい現状がある。本校は、2019年3月に「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」の拠点校として、事業実施にあたることになったことを受け、従来実施してきた海外での校外学習を再整備すると同時に「産業社会と人間」をモデルチェンジし、ローカル・イシューの発見と解決をすることを目的とした新潟県阿賀町での地域探究を組み込んだ。本稿では、新潟県阿賀町での地域探究のための拠点づくりの過程について報告する。

キーワード 地域探究、地域連携、探究的な学習、課題発見、新潟県阿賀町、高大連携、他校との連携

### 1. はじめに

地域を高校の探究活動の主要テーマとした実践報告がここ数年ずいぶん賑やかだ。この場合の〈地域〉は、その高校があるきわめて狭い地域を指しており、どんなに広く見積もっても都道府県をまたぐことはない。そして、地域探究の先進校として頻りに名前を聞く、たとえば、島根県立隠岐島前高等学校、福島県立ふたば未来学園高等学校、大分県立安心院高等学校など、数えればきりが無いが、そのほとんどは地方にある高校で、報告された事例を読む限りにおいて高校の所在地の地方自治体や地域住民が全面的に協力をしているのが特徴だ。それらの地域は、人口減少に端を発し、行き過ぎた高齢化、生産年齢人口の消失、地場産業の衰退、公的サービスの減少などが複合的に絡み合い、コンデンス・イシューともいえる状況に長らくあり、ここ数年で新たに高校を地域活性化の拠点と考えている。そのため、地域と学校とが連携しやすい。もちろん、連携するにあたり、地域住民、学校の教職員、地域連携コーディネーターなどの努力があったことは想像に難くない。

一方、その他の地域では、本校の研究大会に毎年足を運んでくださる学校の教職員の方々から聞く話として、それ

ぞれの学校の教職員が自前で地域と連携を0から模索し、作り、授業化していると言った声が多い。また、地域連携に興味を持っているものの、そもそも連携構築のノウハウがなく、途方に暮れていると言った声もある。

本校は、埼玉県坂戸市にありながら、筑波大学附属の一高校ということもあり、長い歴史の中で坂戸市や埼玉県と柔軟な連携が行われていたかといえ、必ずしもそうとまでは言えない。それぞれの教員がそれぞれかかわりのある生徒を中心として地域とかかわってきたことは、本校の過去の研究大会の資料集からも読み取れる。そして、坂戸市も東武東上線、関越自動車道、圏央道が走り、ベッドタウンとしてのポテンシャルが高く、「地方」としてイシューが視覚化されにくい。また坂戸市は東西に長く、電車を利用する本校生徒にとっては移動の便が悪く、課題を抱えた、たとえば城山地区や東坂戸地区（2019年 台風19号で浸水被害）での活動は制限されてしまう。同じように静岡県浜松市にある静岡県立天竜高等学校は、広大な浜松市の中山間地域との玄関口に位置する高校で、地域とかかわりあいながら探究活動を行う「天竜探究」という授業があるが、山間地域に限界集落が点在していたり、集落までの交通が

確保できなかつたりするために、課題先進地域の中山間地域との連携が十分に進んでいるとは言えない。

つまり、高校が地域を探究する場合、いくつかの条件が必要であると考えられる。1つは、ソーシャル・イシューの濃縮化(コンデンス・イシュー)が自明であること、1つは、地域が高校を地域創生の拠点と認識していること、1つは、地域がコンパクトであり高校生の移動範囲が限定的であること。しかし、大都市部またはその近隣の高校の多くは、これらの条件を満たしにくく、地域探究が大きく制限されてしまうのが現状だろう。

そこで本校は、平成31年度「産業社会と人間」の地域探究では、その拠点を県外に求めることにした。これはいままでもSGHの指定を受ける以前から、ASEAN諸国、特にインドネシアでの国際的な探究活動、研究実践のノウハウがあったこと、それを構築した教員がいたこと、また近年、校内に筑坂ボランティアセンターを開設し、坂戸市に広くボランティアの窓口を設置し、双方向的な交流を行ってきたことが大きい。本稿は、新潟県阿賀町での地域探究のための拠点づくりの軌跡を追うものである。あわよくば、地域連携、地域探究のカリキュラム作りに腐心されている先生方の一助となることを願う。

## 2. 昨今の〈高校生×地域〉言説のまとめ

まず、昨今の高校教育での〈地域〉言説を追ってみたい。平成31年4月22日第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」策定に関する有識者会議(第3回)で文部科学省から提出された「高校と地域づくりについて」では、労働政策研究・研修機構「地方における雇用創出—人材還流の可能性を探る—」平成29年3月31日

(<https://www.jil.go.jp/institute/siryu/2017/188.html>)の調査

分析から、「高校時代までに(転出前に)地元企業を知ったことが、転出後も出身地への愛着として残り、Uターン希望につながっている。」とまとめている(下図)。

一方、岡田 豊(2019)は、人口の一極集中の分析に伴い、地方創生の4つの国の基本目標のうち、これまでの

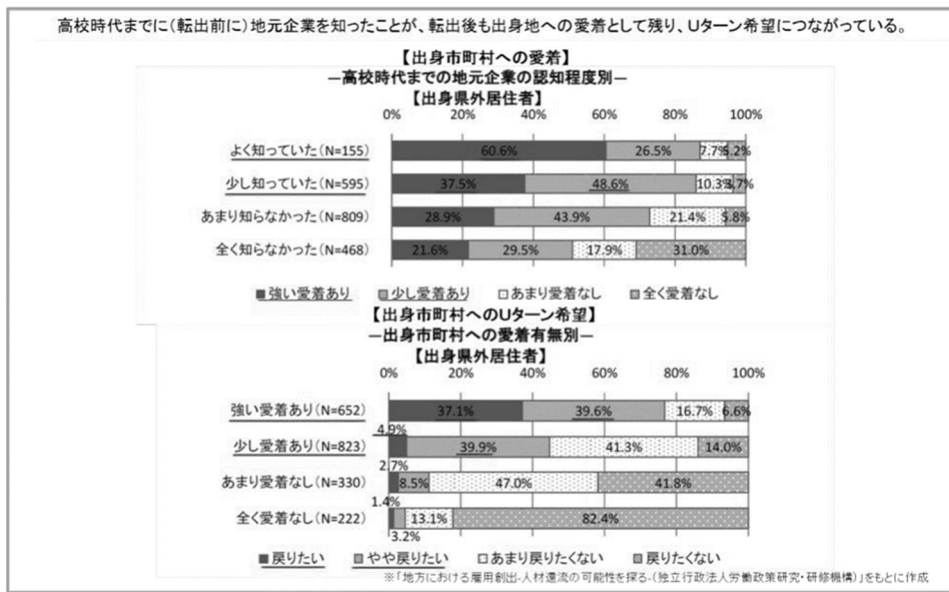
- ①「地方にしごとをつくり、安心して働けるようにする」
- ②「地方への新しいひとの流れをつくる」
- ③「若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる」
- ④「時代に合った地域をつくり、安心なくらしを守るとともに、地域と地域を連携する」

の状況からとりわけ②が達成できていないと指摘している。特に、大学進学後、就職段階において、東京圏以外では「高学歴化が進む若い女性」にとって魅力的な仕事を提供できていないことを問題点としてあげている。

さて、2019年11月に2つの興味深い報告書がまとめられた。

1つは、斎藤薫「地域を元気にする存在としての高校生の可能性」である。この報告書は、「クールジャパン高校生ストーリーコンテスト」から、地域を元気にする“人財”としての高校生の可能性について考察したものである。その中で、高校生の関わりが地域にもたらす効果と可能性を次の5つとした。

- ① 新たな地域資源の発掘
- ② 地域活性化への興味と関心、貢献できる新たな人材の創出
- ③ 地域の大人世代の気づきや変化を促す
- ④ 若者の地域への愛着の醸成
- ⑤ 長期的には域外からの移住、定住の促進につながる関係人口の増加



もう1つは、喜多下 悠貴、阿部 剛志「『魅力ある高校づくり（高校魅力化）』をいかに評価するか～『高校魅力化評価システム』の開発を事例として～」である。「高校魅力化」の定義を水谷（2018）の資料から取りながら、地域・教育魅力化プラットフォームと協働し、地域と高校との連携による高校づくりが、生徒に与える効果を測ろうとするものである。どちらかといえば、島根県立隠岐島前高等学校の取り組みを評価しようとする意図が強い。

**「高校魅力化」とは**

「高校魅力化」とは…

- （どこで） ● **地域という実社会の中で学ぶ**  
（手触りの実物未来社会の箱庭で学ぶ）
  - （誰と） ● **多様な人々と学ぶ**  
（地域の子ども、都会から来た子ども、外国から来た子ども、地域で挑戦する大人、都会から来た大人と学ぶ）
  - （何を） ● **社会の縮図体験としての3年間を過ごす**  
（自らみつけたテーマに対し自ら動き、失敗し、支援から学ぶ）
- …という体験を通して

**未来の社会をつくる“意志ある若者”を育む教育活動**

結論として、島根県における魅力化校は、全国平均に比べ、地域への貢献性、参画性等への意識において、25pt以上の非常に大きな差がみられるほか、「先生、保護者以外に、地域に気軽に話せる大人がいる」という、地域社会と高校生の繋がりにおいても、差は29.3ptと大きくなっている。また、「主体性、協働性、探究性に係る意識においても、同様の傾向が得られている」としている。

**3. 本校研究大会分科会 B（または 3）会場のサブテーマの変遷についての確認**

2016 年度	セッション 3 教科間連携による学校設定科目の運営
2017 年度	セッション 3 高等学校の地域連携・協働について
2018 年度	セッション B 高等学校の地域連携・協働について
2019 年度	セッション B 新潟県阿賀町・新潟大学との連携を事例に

本セッションは、この数年、「連携」について情報共有する場として存在してきた。総合学科高校、専門高校にとって、この「連携」は使い慣れた、使いやすい、使い古されたキーワードだろう。それが、顕在的であるか、潜在的であるかは別として。

本校にとって、「連携」は生徒の〈職業・キャリア観〉とか〈自己選択・決定〉とかという総合学科が好きそうなテーマをつなぎ、〈総合学科の魅力〉を浮き上がらせるための

装置のようなものになっている。そもそも「産業社会と人間」という共通言語を持つ総合学科は、どの学校においても、時間割選択や職業・キャリア選択に膨大な時間を割いている。それは、古い調査になるが、文科省が平成21年度に実施した「総合学科、学校設定科目「産業社会と人間」に関する調査」で、「産業社会と人間」の目標（学校回答）としてあげられているものは、「自己の将来の生き方・働き方や進路について考察する」の割合が圧倒的に高く、「産業社会と人間」という名称からもっともイメージしやすい「我が国の産業の発展とそれがもたらした社会の変化について考察する」が最も低いことからわかる。

蛇足だが、こうした〈職業・キャリア観〉への偏重は、必ずしも総合学科高校に限定されていることではない。2020年に英語4技能・探究学習推進協会（ESIBLA）が創刊した『探究学習白書2020』で、全国の中学校や高校の教員を対象に探究学習の実施状況を独自調査した結果によれば、よく扱われるテーマ（複数回答）は「職業」が最も多く54.1%、次いで「国際理解」が43.6%、「環境」が35.7%である。校種別でみると、中学校では「職業」69.3%と、群を抜いている。また、生徒に人気のあるテーマ（複数回答）として、教員が回答しているものも「職業」が33.2%と、群を抜いており、次に「国際理解」22.4%である。なお、本白書は実に多角的な観点から調査を行っており、各学校の教員がどのような意識で総合な学習（探究）の時間を実施しているのかが立体的に知ることができる。

さて、2016年の本校の「研究大会資料集」では、教科間連携の例として、2つの本校設定科目が紹介されている。それぞれのまとめでそのメリットとして強調されていることは、授業Aでは「ビジネスというすべての分野と関連できる科目が軸となって総合学科のあらゆる教科がつながっていき」くことは「総合学科の良さを最大限に活かした形態」とあり、授業Bでは「普通教科と専門教科の教科間連携はそれぞれが有する教科の独自性を共有することで、より深い学びを生徒に提供できる。（総合学科の弱点の解消に繋がるのではないかと）」とし、さらなる可能性として、「総合学科にある非常勤と教員の授業の質を解消することまでを挙げている。「連携」が校内に限った内向的で閉ざされているにもかかわらず、設定されている到達点は高い。2016年度までの本校の教育実践の中で、そうした狙いに対して、どれだけの達成があったのか検証されていないが、この閉じられた「連携」は2017年度からひとまず外へと向かっていく。「はじめに」の中でも述べたが、本校はこのように必ずしも柔軟に地域と連携してきたとはいえない。2016年段階にあってもなお閉鎖された連携に限定化され

ているのだ。

2017年度からメインテーマが「総合学科を活かした外部連携による学校教育活動の活性化」となった。そのためその年の「研究大会資料集」では、「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）」を冒頭に据え、「キャリア教育」、「新学習指導要領」、「地域活性」といった用語を並べている。またこの年は、参加者間での情報共有の前に、大正大学 地域構想研究所 特任教授 浦崎太郎先生にお越しいただいて、高校と地域とが連携するうえで高校と地域が抱えやすいギャップや、連携がうまくいくために地域側、高校側に必要なモノ・コトについて実践例を交えながら講演していただいている。資料集には、「T-GAP」（総合的な学習の時間）の協力団体一覧、保健体育科の授業におけるオリンピック・パラリンピックに関連する外部団体との連携、福祉科科目における市内中学校の特別支援学級との連携、農業科科目における（株）ヤオコー（筆者注：埼玉県を中心に関東圏に172店舗あるスーパーマーケット）との連携を紹介している。そして「学校と社会の間で学びをつなぐキャリア教育の一層の充実が求められている」と締められている。

2018年度の資料集では、分科会Bでの「連携」の位置づけを、「外部人材、外部資金を介した受動的な地域連携を前提とするのではなく、元来、総合学科高校が持っている地域や実社会とのつながりをもとに、教育活動のなかで主体的に連携し、協働していくことを第一義としたい」とある。これは、文科省が進める「地域との協働による高等学校教育改革の推進」やそれより以前の「コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）」構想などからの教育改革の流れの中で、総合学科高校的なコンテンツを十分に見直すことで、より魅力的で能動的なカリキュラム設計が可能になるのではないかという総合学科の可能性を端緒としている。そして、同時に、本校の「連携」も〈職業・キャリア観から〈地域創生〉へのフェーズへと移行していった。

それと同時に「地域を知る探究や地域の課題を学ぶという緩やかな連携を超え、「高等学校」が中心化された「地方創生」に当事者とされた高校が未来的にどれだけ貢献できるかはやや疑問である。」とまとめた。

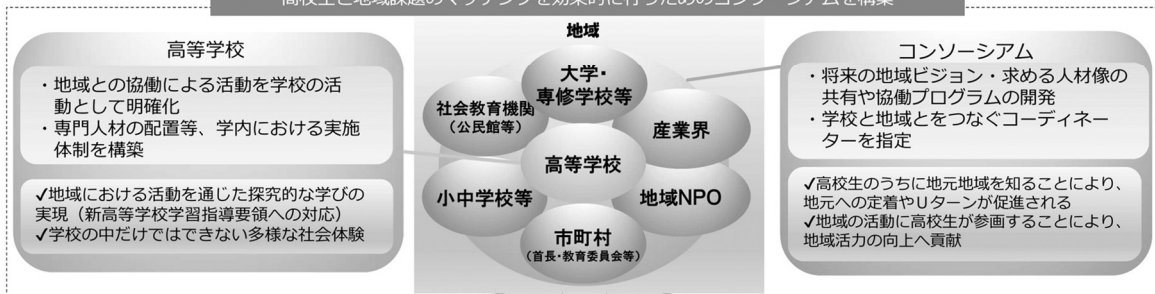
## 地域との協働による高等学校教育改革推進事業

2019年度予算額 251百万円(新規)



新高等学校学習指導要領を踏まえ、Society5.0を地域から分厚く支える人材の育成に向けた教育改革を推進するため、「経済財政運営と改革の基本方針2018」や「まち・ひと・しごと創生基本方針2018」に基づき、高等学校が自治体、高等教育機関、産業界等と協働してコンソーシアムを構築し、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を推進することで、地域振興の核としての高等学校の機能強化を図る。

高校生と地域課題のマッチングを効果的に行うためのコンソーシアムを構築



標準スキームを踏まえつつ、地域の実情や人材ニーズに応じた取組を展開

【プロフェッショナル型】  
〈専門学科中心10校程度〉  
地域の産業界等との連携・協働による実践的な職業教育を推進し、地域に求められる人材を育成

～特徴・取組例～

- ・地域の特産物の付加価値を高め安定的な食料生産により地域の発展を担う人材を育成
- ・ものづくりに関する専門的な技術を身に付け、地場産業を支える人材を育成 など

【地域魅力化型】  
〈普通科中心20校程度〉  
地域課題の解決等を通じた学習を各教科・科目や学校設定科目等において体系的に実施するためのカリキュラムを構築し、地域ならではの新しい価値を創造する人材を育成

～特徴・取組例～

- ・地域との連携に係る教科横断的な単位を設定
- ・衰退しつつある地域の振興方策を地域との連携により研究・実践 など

【グローバル型】  
〈学科共通20校程度〉  
グローバルな視点を持ってコミュニティを支える地域のリーダーを育成。

～特徴・取組例～

- ・グローバルな社会課題研究のカリキュラム研究開発
- ・海外研修等カリキュラムの中に体系的に位置づけ
- ・海外からの留学生を受け入れるなど外国人生徒と一緒に授業・探究活動等を履修
- ・コミュニケーション能力を重視した外国語（複数外国語含む）の先進的な授業を実践 など

#### 4. 阿賀町校外学習について

本校では、2019年3月に「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」の実施機関に筑波大学が指定され、本校が、その拠点校として、事業実施にあたることになったことを受け、従来実施してきた海外での校外学習を再整備すると同時に、新たに「産業社会と人間」をモデルチェンジし、その中に、ローカル・イシューの発見と解決をすることを目的とした県外でのフィールドワークを組み込んだ。別途、高大連携が可能な探究活動のフィールドとして2年がかりで選定していた新潟県阿賀町に決めた。阿賀町とした理由は、第一に、教育旅行と民泊の受け入れを約20年にわたり実施しており、安全で安心な民泊が担保されていたこと、次に、阿賀町役場が阿賀町観光協会を通じて極めて協力的に本校生徒の探究活動をサポートしてくれようとしていたこと、最後に、本校で用意した観光バスを有

効活用し、それぞれの探究活動場所への移動プランを観光協会が立て、実施可能であったことである。これらは「はじめに」で述べた高校生にとって理想的な探究フィールドと高いマッチングを示している。

目的は以下の3点。

- ・首都圏に住む生徒の日常からかけ離れた生活（食生活、住環境、文化など）を体験する。
- ・異なる文化や考え方に触れることによって他者を理解する意識を養う。
- ・社会の課題先進地域の阿賀町で、地域の課題を見る、学ぶ、体験する。

#### 概要

期間：2019年7月16日(火)～19日(金)

場所：新潟県阿賀町周辺

宿泊：1日目～2日目 阿賀町民泊

3日目 ホテル角神泊

7/16 (火)		
7:45	本校出発	
12:15	阿賀町到着	阿賀町文化福祉会館
13:00	開村式	① 本校副校長あいさつ ② 阿賀町町長講演 神田一秋氏 ③ 諸連絡
14:15	ガイダンス	あがのがわ環境学舎3日目プログラムに関する事前講義
15:45	民泊諸注意	一般社団法人あがのがわ環境学舎 山崎陽氏 民泊班の再確認、民泊時の注意点
7/17 (水)		
8:00	集合	民泊先から拠点集合(阿賀町津川B&G海洋センター)
10:00	アクティビティ開始	班別アクティビティのテーマ A 阿賀黎明中学校・高校 交流会 B 阿賀町職場体験 地域貢献活動をしよう C 地域創生について考える 地域おこし隊との交流
16:00		
7/18 (木)		
08:25	集合	民泊先から拠点集合(阿賀町津川B&G海洋センター)
08:50	スタディプログラム開始	あがのがわ環境学習ツアープログラム ①旧昭和電工(株)鹿瀬工場の光と影をたどるプログラム ②現在の排水処理を視察するプログラム
13:00	振り返り	グループごとに発表のためのポスター作成
16:30	発表会	協力：新潟大学 ポスター発表
7/19 (金)		
7:45	閉村式	阿賀町観光協会 大堀洋之氏
11:00	新潟大学	新潟大学の学生と合流 大学生との交流会、キャンパスツアー等
18:30	本校帰着	

このツアーで、民泊を選択した理由としては、前述した通り、本校は WWL の拠点校として「国際フィールドワークを通じて持続可能な国際社会を創る人材育成システムの構築」をテーマとして掲げており、本プログラムは海外でのフィールドワークやホームステイの前段階として設計し、実施するものだったためである。

以下、準備から振り返り段階を記す。(役職については当時。)

2018.02.23

(株) JTB 川越支店に、福島、伊豆、新潟を中心に地域学習と民泊ができる場所の調査を依頼

2018.03.08

阿賀町観光協会 大堀洋之氏、坂上英男氏、JTB 細木咲帆氏によるプレゼン

2018.03.21～22 新潟県訪問

観光協会 大堀氏による阿賀町案内・概要説明  
新潟県「大学生の力を生かした集落活性化事業」成果報告会参加 (03.22)

2018.07.27

新潟大学創生学部 准教授 澤邊潤氏とメールにて意見交換

2018.07.31～08.03 阿賀町下見

阿賀町役場 総務課、農林商工課、観光振興課、まちづくり観光課、阿賀町集落支援員、阿賀町教育委員会、阿賀町観光協会、阿賀町郷土資料館、あがのがわ環境学舎、黎明学舎、阿賀黎明中学・高等学校、阿賀町総合福祉保健センター「やまぶきの里」、山崎糝屋、越後ファーム、阿賀ウッド、ホテル角神、新潟大学

2018.11.20

阿賀町教育長より本校校長田村憲司宛に書簡が届く

2018.12.19

新潟大学 澤邊氏来校 打ち合わせ

2019.01.29～30 阿賀町訪問

新潟大学 澤邊氏、木村氏に同行。阿賀町役場、阿賀町観光協会、麒麟山酒造、SUZUVEL、新潟県粟島浦村総合政策室

2019.03.26 シンポジウム「高大接続の将来像」参加

於：一橋大学一橋講堂 澤邊氏と意見交換

2019.05.11

1 年次保護者会 あがのがわ環境学舎による保護者向けガイダンス

2019.05.13

「産業社会と人間」澤邊氏講演

2019.05.16

阿賀黎明高等学校 教頭 尾上博司氏と交流会の詳細について共有

2019.05.21～22

阿賀町 本校校長 田村 訪問

阿賀黎明高校、黎明学舎、阿賀町役場、阿賀町観光協会

2019.06.02

大学教育学会ラウンドテーブル参加 (於：玉川大学)  
「長期学外学修(ギャップイヤー)による人材育成のデザイン」発表

2019.07.16～19

阿賀町校外学習

2019.08.07

阿賀町観光協会 大堀氏、ホテル角神、JTB 細木氏来校  
振り返りと来年度の打ち合わせ

2019.11.10

AP 事業テーマIV「長期学外学修プログラム (ギャップイヤー)」合同総括シンポジウム参加 新潟大学の学長等との意見交換と振り返り

本校の阿賀町校外学習の準備には、上記のように阿賀町役場はじめ、観光協会、阿賀黎明高等学校、新潟大学の方々の全面的な協力があったことを特に記しておく。

## 5. 阿賀黎明高等学校との交流について

本校は、従来より、国際フィールドワークや校外学習等で、海外の高校生との探究活動を通じた交流を頻繁に実施してきた。そのため、国内版校外学習の計画にあたって、早い段階から町内唯一の高等学校である阿賀黎明高等学校の生徒との交流を模索していた。阿賀黎明高等学校には阿賀町の歴史や魅力を学ぶ教科「地域学」があり、また公営塾の黎明学舎が併設され、生徒たちのキャリア観の醸成を担っている。しかし、生徒数が少ないこと、共同で探究活動を行うには町のキャパシティが大きくないことから、本校からの参加人数を限定して交流することとした。そこで、高校生間交流型探究活動を希望する本校の生徒には、課題を出し、その内容によって選抜を行った。課題の目的は2点あり、交流を行う際に不用意かつ不本意な地方蔑視や差別を行わないため、地域活性化の取り組みをすでに行っている阿賀黎明高等学校の高校生とのスキル・熱量の差を事前に埋めるためである。

課題は以下のとおり。

### 課題1

google で「高校生 地域活性化」で検索し、高校生が地域活性化に参画している事例を探し、紹介しなさい。

### 課題2

地域活性化に高校生が参画する意義について、あなたの考えを書きなさい。

### 課題3

google マップで「新潟県立阿賀黎明中学校・高等学校」から「住吉神社 (〒959-4402 新潟県東蒲原郡阿賀町津川 3395)」までを、高校生としてどんな地域ブランディング、シビックプライドの醸成、シティプロモーションの推進が可能か、具体的に計画して説明しなさい。図や写真を添付しても構わない。もし、書ききれない場合は、別紙を各自用意して追加すること。

実際に、「産業社会と人間」や「グローバルライフ (共生分野)」においても地域活性化や高校生による地域貢献の授業は行ってきたが、生徒ひとりひとりが主体的に地域について調査していくことは意味があった。全国ではさまざまな高校生たちがもうすでに魅力的な地域探究や地域との連携を実践していることに生徒たちは驚いていた。またわれわれ教員側が予想していなかったこととしては、課題3で出題したことが、阿賀黎明高校の生徒たちが自覚していたなかった阿賀町の魅力の発掘、再発見につながるもので、その地域に住む高校生たちにとっては当たり前の日常だったものが、他県に住む本校の生徒から見ると実は新しく魅力に富んだものであるという理解を得るきっかけとなった。(資料1) 高校生との交流グループの選抜課題の回答は2つの例ではあるが、これ以外の生徒も、特に課題3については、高齢者や小中学生などと交流や協働しながら、町を盛り上げていくイメージが作られている。上段の生徒は、高齢者の参加イベントを作ったり、店舗同士の連携や商店街でのスタンプラリーを考えたりしたようだ。下段の生徒は、計画段階から観光協会や行政、商工会などにプレゼンをしていくことが描かれている。それらのアイデアはおそらくは課題1で調査した、現在、地域活性化にかかわっている高校生たちの実践例を調べていくなかで獲得した観点ではないだろうか。高校生として独善的に計画するのではなく、多くの人を巻き込み、かかわってもらいながら計画を実践していこうとすることの大切さをこの課題によって学んだのだろう。

筆者は、校内ボランティアセンターの運営をしていく中で、多くの生徒たちを近隣の地域に送り出してきたが、なかなかその施設やグループ、地域について調査するこ

とはない。ボランティアはどうしても現実的に目の前に困っている人がいる以上、アクションが中心となる。阿賀町校外学習のような県外での探究活動のメリットは、少し距離を置いたところから社会的な課題を見つめることができることにあるのではないだろうか。

## 6. 新潟大学との連携

2017 年度まで開講されていた本校設置科目「キャリアデザイン」(2 単位) では、高大連携の中で 2015 年度からは大学の初年次教育を模して、アカデミックスキルのテキストを生徒ひとりひとりに用意し、研究の仕方、論文の書き方などを指導する場としていた。2018 年度から廃止されたため、「産業社会と人間」の中でアカデミックスキルの単元を入れようとするも窮屈なスケジュールを余儀なくされた。また、本校が入学式後に実施しているコミュニケーションキャンプも 2019 年度から大幅に内容が変更され、クラスづくりやチームビルディングに特化した PA を中心としたものとしたため、結果的に、高校入学時オリエンテーションやスタディスキルのレクチャーが除外されてしまった。

それらによって、生徒のアカデミックスキルの習得に対し、より効率的で合理的な方法を模索しなければいけなかった。特に、フィールドワークの仕方、情報のまとめ方、ポスター作成のスキル、発表スキルについては、最優先的に希望していた。

「キャリアデザイン」が担っていたアカデミックスキルズやスタディスキルズを習得する場として、大学との連携を強く希望していた。学年が早い段階での大学の研究室との連携が、「卒業研究」(3 年次 3 単位) で論文を書く生徒たちの動機になってほしいという思いもあった。

阿賀町を校外学習の候補地をしてから、阿賀町でのフィールドワークをしている大学を探している中で、「新潟日報モア」2018 年 6 月 14 日 (<http://www.niigata-nippo.co.jp/news/local/20180614399820.html> 現在ページは削除されているため記事の閲覧不可) で新潟大学の学生の活動と、「地元学入門」という授業を知る。そこで、新潟大学の「地元学入門」のシラバス (2018/03/21 更新 [http://syllabus.niigata-u.ac.jp/syllabusHtml/2018/84/84\\_180G3913\\_ja\\_JP.html](http://syllabus.niigata-u.ac.jp/syllabusHtml/2018/84/84_180G3913_ja_JP.html)) を参

考に、阿賀町校外学習の設計をすることにした。

## 「地元学入門」

### 科目の概要／Course Outline

新潟県「阿賀町」をフィールドとして、現地で活躍する方々や関係のある人々の知見に触れ、「実際に現場に出て考える」ことを通じて、受講生が新潟の文化（食・自然・歴史等）の魅力に気づき、活性化につながるプランを提案するためのフィールドワーク入門科目である。この科目を通じて、地域創生、まちづくりに向けた課題発見や関連する学修への動機づけを高めることを目的とする。

### 科目のねらい／Course Objectives

本科目では、「阿賀町」の地域資源（歴史、風土、自然、水、環境等）についてフィールドワークを通じて体感する。フィールドワークやグループワークを踏まえて、学生視点での阿賀町の地域資源、魅力の再発見・再確認をねらう。

講義では事前学修、学外学修（1日のフィールドワーク）、事後学修で構成する。事前学習では、外部有識者からのレクチャーを踏まえ、「ものごとをみる視点」「流通」を意識して、フィールドワークのデザインを考える。そのうえで、チームでの学外学修（フィールドワーク）、事後学修（プレゼンテーション）によって、「ものを見る力」「デザイン力」の重要性を実感し、地域資源を活用した新しい企画や提案にチャレンジする。

### 学習の到達目標／Specific Learning Objectives

本科目では、以下の3つを学習の到達目標とする。

- ①問題意識を明確にしてフィールドワーク設計ができる
- ②ターゲットを意識した提案型プレゼンテーションができる
- ③グループ活動において協働的なメンバーシップを発揮できる

それから、2018年7月27日新潟大学に協力をお願いしたところ、快諾していただき、今に至る。

そもそも前述したように、阿賀町校外学習のプランは、新潟大学の「地元学入門」を種としている。また澤邊先生には企画段階から阿賀町内での人脈作りまで（公私ともに）幅広く協力していただいた。校外学習中7月18日午後以降の振り返り会とポスター発表では、新潟大学創生学部から澤邊氏、教育・学生支援機構から上畠洋佑氏と木村裕斗氏、学生5名に、振り返りのファシリテーション、発表サポートを行っていただいた。発表会には、民泊先の方、黎明学舎のスタッフの方々が参加し、ご意見やご助言をいただいた。将来的には、班別アクティビティ先の方や地元住

民の方々に参加していただけるようになるとういだろう。

翌19日のランチ会とその後の交流会には、12人の学生が参加し、大学生活や学問について熱心に高校生に話した。



大学生がメンターとなって、「先輩としてのキャリア」を話すことで、高校生はより身近な未来として自分をイメージすることができたようだ。教員が真面目に話す以上に、高校生への訴求効果が高い。それは生徒のアンケート結果からも十分読み取れた。また大学図書館の見学では、多くの高校生が膨大な蔵書に驚いていた。



## 7. カリキュラムマネジメントと校外学習

この項でいう「カリキュラムマネジメント」とは、本来的な意味ではなく、阿賀町校外学習を補強するための周辺領域の授業を念頭に置いたものである。2019年度時点では、残念ながら阿賀町校外学習や「産業社会と人間」を中心にカリキュラムデザインが行われているとは言えず、教育課程も再編成されていない。今後、そうした流れになっていくことを望んでいる。しかし、その嚆矢として、2019年度は、筆者が担当する国語総合と「グローバルライフ」との連携を紹介したい。

2019年度は事前事後学習をそれぞれ「グローバルライフ」(共生分野)と「国語総合」で実施した。

まず、「グローバルライフ」の(共生)分野では、全5時間の授業で、坂戸市内の社会課題と課題解決についての授業を行った。

第1回 ボランティアについて考える、共生社会について考える

第2回 自分のクラスの社会課題について、解決のための具体案を考える

自分たちで考えた課題解決方法を実践してみる

第3回 坂戸市の社会課題について知る

「第6次坂戸市総合振興計画後期基本計画」

<https://www.city.sakado.lg.jp/soshiki/2/876.html>

「第2次阿賀町総合計画」(平成27年度～平成36年度)<http://www.town.aga.niigata.jp/gyousei/about/02sougou/index.html>を比較する

第4回 高校生が考える社会貢献アワード(坂戸市の社会課題をテーマとして)

第5回 振り返りと改善案の提出

「産業社会と人間」における阿賀町校外学習のガイダンスと並行して、「第6次坂戸市総合振興計画後期基本計画」内でキーワード化している〈シビックプラウド〉と〈シティプロモーション〉について丁寧な理解を促すことで、阿賀町への視線がポジティブになる印象を授業者として持った。生徒は都会に比べて何もないというマインドから解放され、地方ならではの特徴的な魅力の発掘に意識が向いていく。そうした地方や地域課題に対するポジティブな生徒の意識は、阿賀町校外学習を実施するうえで大きな意味があった。受け入れ団体や民泊先から好意的な振り返りコメントをいただいたのは、この事前準備、事前学習があったからといっても過言ではない。

次に事後学習として行った「国語総合」では、校外学習実施前に9月の授業でフォトエッセイを作成する旨を生徒に告知し、阿賀町を象徴する一枚の写真を選択してお

くことを指示した。授業は2時間を設定し、授業内で生徒に下書き原稿、清書の作成をさせた。クラスによっては2時間では終わらなかった。クラスによっては、小グループ内で発表させ、さらに1時間追加した場合があった。

このフォトエッセイについては、国語総合の中で「書く」観点で評価した。ループリックは、稿末の〈資料〉参照。

## 8. 生徒による学びの自己評価(2019年11月実施)

本校では11月下旬から12月上旬にかけて、時間割選択がある。その前の段階で、改めて阿賀町校外学習を振り返り、どのような力がついたと考えるかのアンケートを行った。アンケートの回答は、google フォームから投稿させた。この手のアンケートの場合、事後アンケートであれば、心情やその変化を問うものが多い印象が強い。そうしたアンケートの有用性は否定しないものの、総合学科として、社会との連続性を考えたときに、具体的に生徒自身がその体験を通してどのような力を獲得したと考えるのかを問うアンケートを行いたいと考えた。回答項目としては、経済産業省の「人生100年時代の社会人基礎力」に本校独自の項目を加えたものとした。また生徒たちの自由記述欄は、(株)ユーザーローカルのAIテキストマイニング(<https://textmining.userlocal.jp/>)を利用し、解析した。

【産社】阿賀町での経験がどうかされているか・影響されているか自覚するアンケート

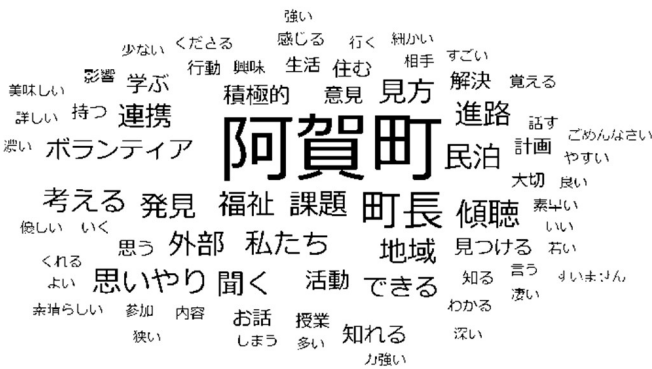
設問1 「町長さんの話」は、今皆さんの生活にどのような部分にいかされている、もしくは影響していますか?

課題発見力	50人(12.5%)
傾聴力(相手の意見を丁寧に聞く力)	42人(10.5%)
思いやり	33人(8.3%)
福祉に対する見方	31人(7.8%)
いかされていない・影響されていない	27人(6.8%)

(複数選択可)

設問2 「設問1で選択したものについて教えてください。阿賀町でのどのような経験が、どのようにいかされているのか・影響されているのかを、理由を具体的に書いてください。」という設問に対する生徒の回答のワード

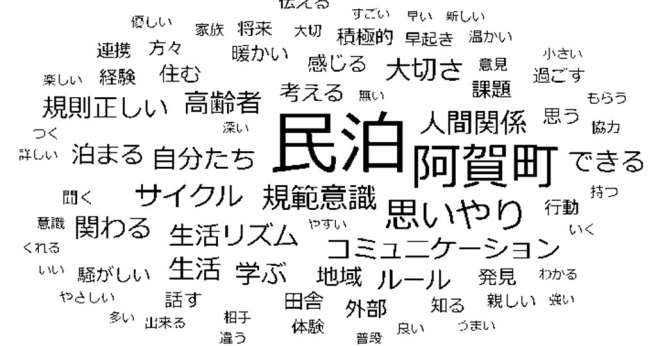
クラウド。(スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさを図示しているもの。)



設問3 「民泊」は、今皆さんの生活にどのような部分にいかされている、もしくは影響していますか？(複数選択可)

思いやり	73人(17.5%)
人間関係	54人(12.9%)
外部の人と連携する力	36人(8.6%)
生活サイクル(リズム)	34人(8.2%)
規範意識(社会のルールや人との約束を守る力)	28人(6.7%)

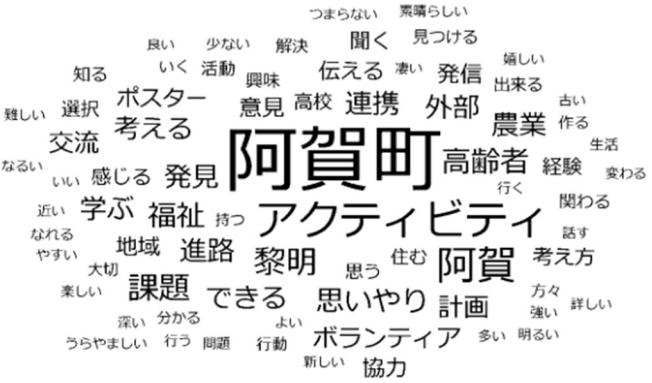
設問4 「設問3で選択したものについて教えてください。阿賀町でのどのような経験が、どのようにいかされているのか・影響されているのかを、理由を具体的に書いてください。」という設問に対する生徒の回答のワードクラウド。(スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさを図示しているもの。)



設問5 「アクティビティ」は、今皆さんの生活にどのような部分にいかされている、もしくは影響していますか？(複数選択可)

課題発見力	55人(10.3%)
人間関係	39人(7.3%)
実行力	38人(7.1%)
外部の人と連携する力	38人(7.1%)
発信力(自分の意見を伝える力)	35人(6.5%)

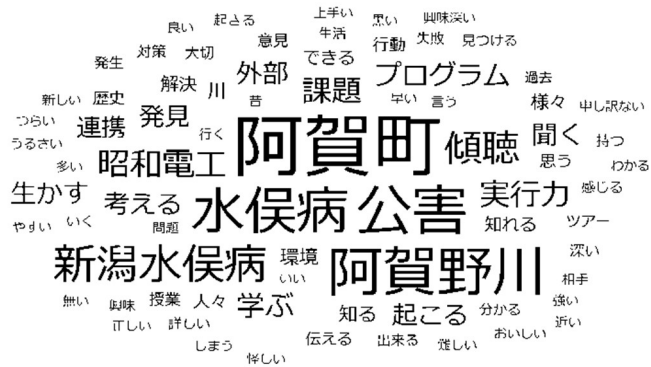
設問6 「設問5で選択したものについて教えてください。阿賀町でのどのような経験が、どのようにいかされているのか・影響されているのかを、理由を具体的に書いてください。」という設問に対する生徒の回答のワードクラウド。(スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさを図示しているもの。)



設問7 「あがのがわ環境学舎ツアープログラム」は、今皆さんの生活にどのような部分にいかされている、もしくは影響していますか？(複数選択可)

課題発見力	44人(14.4%)
傾聴力(相手の意見を丁寧に聞く力)	34人(11.1%)
外部の人と連携する力	26人(8.5%)
規範意識(社会のルールや人との約束を守る力)	25人(8.2%)
いかされていない・影響されていない	25人(8.2%)

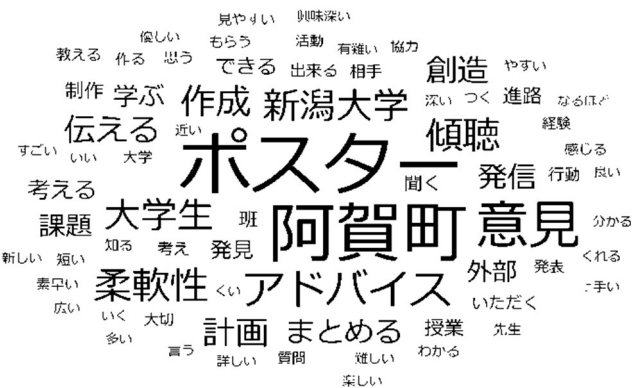
設問8 「設問7で選択したものについて教えてください。阿賀町でのどのような経験が、どのようにいかされているのか・影響されているのかを、理由を具体的に書いてください。」という設問に対する生徒の回答のワードクラウド。(スコアが高い単語を複数選出、その値に応じた大きさで図示しているもの。)



設問9 「ポスター作成時に新潟大学の先生・大学生からアドバイスをいただいた経験」は、今皆さんの生活にどのような部分にいかされている、もしくは影響していますか？(複数選択可)

創造力	38人(9.8%)
計画力	37人(9.5%)
発信力(自分の意見を伝える力)	35人(9.0%)
傾聴力(相手の意見を丁寧に聞く力)	30人(7.7%)
実行力	28人(7.2%)

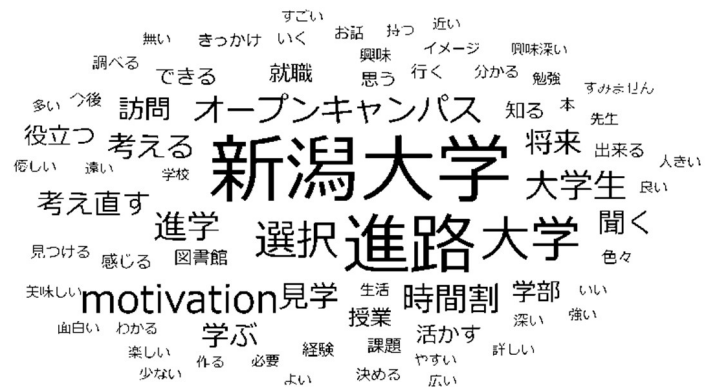
設問10 「設問9で選択したものについて教えてください。阿賀町でのどのような経験が、どのようにいかされているのか・影響されているのかを、理由を具体的に書いてください。」という設問に対する生徒の回答のワードクラウド。(スコアが高い単語を複数選出、その値に応じた大きさで図示しているもの。)



設問11 「新潟大学訪問」は、今皆さんの生活にどのような部分にいかされている、もしくは影響していますか？(複数選択可)

進路選択(進学・就職)	108人(35.2%)
人生設計	32人(10.4%)
時間割選択	26人(8.5%)
授業でのモチベーション	22人(7.2%)
いかされていない・影響されていない	15人(4.9%)

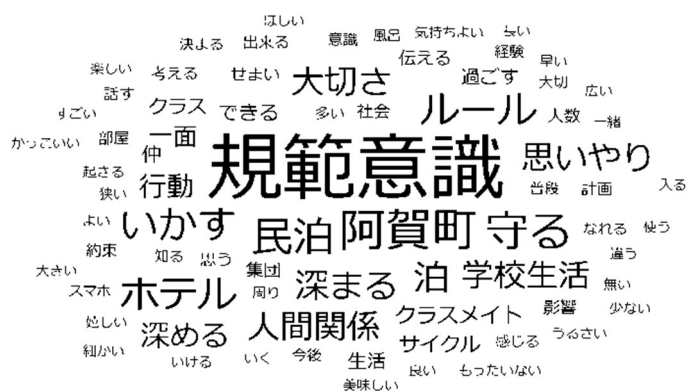
設問12 「設問11で選択したものについて教えてください。阿賀町でのどのような経験が、どのようにいかされているのか・影響されているのかを、理由を具体的に書いてください。」という設問に対する生徒の回答のワードクラウド。(スコアが高い単語を複数選出、その値に応じた大きさで図示しているもの。)



設問13 「ホテル泊」は、今皆さんの生活にどのような部分にいかされている、もしくは影響していますか？(複数選択可)

人間関係	56人(19.0%)
規範意識(社会のルールや人との約束を守る力)	41人(13.9%)
いかされていない・影響されていない	41人(13.9%)
生活サイクル(リズム)	30人(10.2%)
思いやり	30人(10.2%)

設問 14 「設問 13 で選択したものについて答えてください。阿賀町でのどのような経験が、どのようにいかされているのか・影響されているのかを、理由を具体的に書いてください。」という設問に対する生徒の回答のワードクラウド。(スコアが高い単語を複数選出、その値に応じた大きさで図示しているもの。)



【資料1】高校生との交流グループの選抜課題の回答

金 5時

阿賀町校外学習 アクティビティ 1 A 阿賀黎明中学・高校 交流会 参加者 課題 産社BOX ST

**課題 1**  
googleで「高校生 地域活性化」で検索し、高校生が地域活性化に参画している事例を探し、紹介しなさい。

「ウチワイプロジェクト」STAP UP 倉庫、が 2019年 2月10日  
から12日に行われた。県内の高校生と県立の大学生が地元  
の課題を解決するためにどんな行動が出来るかを  
話しあっている。2019年から始まったウチワイプロジェクト。  
高専生を対象とした身の回りの課題や自分自身の関心  
からプロジェクトを立ち上げ、実行することを決めた  
学生、探究型の学習プログラム。高校生が自分自身の  
興味関心に基づいて地域の課題を見つけ、解決に向け  
取り組んだ。また、意見交換を繰り返して、アイデアを  
行い計画を練り上げていく。

**課題 2**  
地域活性化に高校生が参画する意義について、あなたの考えを書きなさい。

高校生が参画することにより、社会的な政策や  
着目が見えたりする意義に参画することで  
社会に参画する第一歩としてとらえられて  
いる。また、若者の柔軟な頭を働かせ、これまで  
なかった視点を生み出すことができ、若者の視点  
から参画することにより、違うものが出来る  
と思う。着目が見えたりする意義を自分自身に  
参画することで日常的に出来ることになり  
思う。

阿賀町校外学習 アクティビティ 1 A 阿賀黎明中学・高校 交流会 参加者 課題  
課題 3  
google マップで「新潟県立阿賀黎明中学校・高等学校」から「住吉神社 (〒959-4402 新潟県  
東蒲原郡阿賀町津川 3395)」までを、高校生としてどんな地域プランニング、シビックプライ  
ドの醸成、シティブロモーションの推進が可能か、具体的に計画して説明しなさい。図や写真を  
添付しても構わない。もし、書ききれない場合は、別紙を各自用意して追加すること。

津川城... 桑指史跡  
神原... 国の天然記念物

各自治体の運営は各自が地域に  
関心を持って取り組むこと  
が大切で、住民参加が重要  
な役割を果たしている。イシュー  
が解決できるようにしたい。

各自治体の運営は各自が地域に  
関心を持って取り組むこと  
が大切で、住民参加が重要  
な役割を果たしている。イシュー  
が解決できるようにしたい。

各自治体の運営は各自が地域に  
関心を持って取り組むこと  
が大切で、住民参加が重要  
な役割を果たしている。イシュー  
が解決できるようにしたい。

今週金曜日AM5:00まで 国語科 栗飯原先生産社BOX

阿賀町校外学習 アクティビティ 1 A 阿賀黎明中学・高校 交流会 参加者 課題

**課題 1**  
googleで「高校生 地域活性化」で検索し、高校生が地域活性化に参画している事例を探し、紹介しなさい。

＜高校生レストラン「まごの店」(三重県立相可高校食物調理科調理クラブ)＞  
・勿気町という場所で行われていて、農業公園(五輪池)ふるさと村に高  
校生が運営する研修レストランを開設した。在りから調理 接客並みに  
経営まで一貫した実践を通して高い実践力に身に付けている。隣接観光物  
産販売所から仕入れている。毎日満員の賑わいを見せている年間15000食  
売上高は約5000万円となり、現在は自治体からの補助を受けずに自主管  
営を行っている。県内外からの利用客が増えたことにより、地域の交通人口  
の増加に貢献している。地元産品の卸売も、も食材として活用  
したことにより、特産品の知名度の上昇に貢献している。地元に残る人の増  
加や飲食業に参画する者が増えたこと、卒業生の地元愛の向上などにより、  
地域の人材定着に大きく貢献を生み出している。

**課題 2**  
地域活性化に高校生が参画する意義について、あなたの考えを書きなさい。

私が参画する地域活性化へ高校生が参画する意義は、「地元LOVERの  
人が増えることにより、その人が地域を外人紹介する力が皆が持つこと  
ができること」と思っています。要約すると、高校生が地元を知り、愛するこ  
とにより間接的に地元の発展が促されていく、伝わりやすくなること。こ  
つも自分の力を活かせることで、私がおいた卒業生に於いては、半年間以上  
地元の伝統文化や歴史を学ぶことができる機会がありました。この機会に  
ならずとも、文化や地域の発展に貢献し、とても重要な役割を果たすこ  
とができる貴重な時間でした。この学習で私は、地元の事はら、地元の情を  
感じる事ができました。人情、歴史などその土地の人でしかわからない気  
さや考え方が知ることができ、自分も地元の人間であり、伝統や歴史を  
守っていく責任が重くなることになりました。また、地元  
とのふれあいや、体験、学習、すべてがともしの参画であり、とても大切  
なことであると思います。

阿賀町校外学習 アクティビティ 1 A 阿賀黎明中学・高校 交流会 参加者 課題  
課題 3  
google マップで「新潟県立阿賀黎明中学校・高等学校」から「住吉神社 (〒959-4402 新潟県  
東蒲原郡阿賀町津川 3395)」までを、高校生としてどんな地域プランニング、シビックプライ  
ドの醸成、シティブロモーションの推進が可能か、具体的に計画して説明しなさい。図や写真を  
添付しても構わない。もし、書ききれない場合は、別紙を各自用意して追加すること。

津川地区で町を盛り上げることができると考えた。  
＜津川、狐の嫁入り物語通り大作戦＞  
①小中学生から、絵やイメージを出してもらおう。  
②イメージが集まったら、計画を立てる前に観光協会や地元  
のみんなに理解してもらおう。計画に参画してもらうために、  
原案を立ててプレゼンする。(質疑応答や参加地元の  
側からのアイデア、提案を受け入れる。もし無理だとわか  
れた時には、通り沿い以外の参画も考える。例：神社  
や家の前で点と点を繋ぐように作る。スポット形式  
他の観光地などと合わせて、スリッパ作りなど)  
③原案ができたなら、自分の計画をより現実的なもの  
に計画していく。(1.どんなアート・ストーリーで2.どこに  
どんなものを作るか3.どのくらい費用がかかるか4.  
4.工事期間はどれくらいか5.完成後のアピール方法)  
④行政・自治体・観光協会・商工会の最終ミーティング(プレゼン)  
⑤計画が通ったら、アートを作り始める。(通らなかつたら、  
何度も②、③をやり直し。)1.小中学生・地元住民など  
のかかりてみんなで作る。(多様な個性の表現)2.他団体  
や他学校、他地域にも参加を呼び掛ける。＜ハンドメイド  
インターネット等＞女性で作ることが大切。(ホリデー・  
付加価値・リピーター等)

〈資料2〉国語総合 夏休みの課題 阿賀町フォトエッセイ

国語総合 2019.09

わたし/ほくにとつての阿賀町

あなたにとつての阿賀町の印象、感じたこと、考えたことを400字以内で書きなさい。  
※このエッセイは、阿賀町高等学校の生徒たちが、「総合的な学習の時間」の授業で使用することがあります。




写真についての説明書き  
左の写真は、阿賀町  
子細くや阿賀町  
中学校及び高等学校の生  
徒の皆様が登山した水  
阿賀町の富士山と野原  
川と緑豊かな山の写真であ  
る。当日は晴れ渡る青空に、  
掴み取れそうな涼しくて  
ふんわりとした空気が  
あり、見る者全てが夏を  
感じるものにたとえよう。

私が阿賀町へ行って感じたこと。それは、阿賀町が「  
絵になら町」であることだ。今日の携帯電話には、沢山の  
の撮影機能が搭載されている。だが、今回は全て無加  
えて、「本物の阿賀町」を収めた。家に帰って確認して  
みると、私はとても驚いた。何もしていないとは思えな  
い程、どれも美しかったのだ。物論、私は写真技術があ  
る訳ではない。つまり、阿賀町の景色そのものが、美し  
さをまとうているということだ。彩やかな花々にとま  
るとんぼ、風に舞う蝶。どの場面を切り取っても、絵に描  
いた様に素敵だった。ただ、私はまだ、阿賀町の夏しか  
知らない。春にはももや桜が咲いていて、秋は紅葉の赤  
や橙が山を彩るだろう。雪明かりの灯る冬景色も、き  
っと綺麗に違いない。想像をすればする程、頭の中は楽し  
か。記憶と、再び訪れてみたいという気持ちでいっぱい  
になる。私のまだ見ぬ阿賀町を、いつかこの目で見て  
みたい。この思いが愛おむことは、決してないだろう。

国語総合 2019.09

わたし/ほくにとつての阿賀町

あなたにとつての阿賀町の印象、感じたこと、考えたことを400字以内で書きなさい。  
※このエッセイは、阿賀町高等学校の生徒たちが、「総合的な学習の時間」の授業で使用することがあります。



写真についての説明書き  
民泊の朝食の様  
子。民泊ではほぼ自  
給自足の生活をし  
ていて、お皿とれた  
新鮮な野菜も使  
用している。私は私  
普通椅子に座って  
居るものの床に座  
て居る人との間隔  
が縮まった様に感じた。

私が初めて阿賀町を訪れたときの印象は、まさに田舎  
の光景だ。大町は大きくて綺麗な阿賀野川が流れて  
いて、周りには自然が溢れている。しかし、住民の脚  
手精神は都会では味わえない程、静かだ。た  
くさん、私は平日に人の暮らしについて考えま  
す。インターネット環境を整えていけば、今の時  
代を生きていくのは不便ではない。また、バス  
交通の便が悪かったり、実際に住民の方にはモ  
ト子高齢  
化」「人口減少」という言葉の危機感を覚  
えていた。今  
ここで私は、SNSを活用して、多くの方に阿賀町を知  
ってもらってほしいと考えた。以前、私は  
阿賀町は豊かだけど自然は豊かだ、以前、私は  
あんなに思えないほど自然を自然に体験でき  
る阿賀町でしか得られないものを、特に若者に伝え  
てい  
くべきだと考えた。  
私は、機会があれば是非また阿賀町へ行ってみたい。

このフォトエッセイについては、国語総合の中で「書く」観点で評価した。ルーブリックを以下に記す。

写真のキャッチーさ	写真の説明	エッセイの内容	語句、文法、構成など
2 写真が強く興味を引き付ける	5 補完性が極めて優れている	読み手の注意を引き付ける 2・0	段落の有 (1)・無 誤字脱字の無 (1)・有
1 写真がなにかある	3 適切な説明がついている	ポジティブ・明るい内容 2・0	語彙・文法の適当性の有 (1)・無
0 写真がない	1 説明がなにかある	テーマとの合致 (阿賀町の印象) ※1 3・2・1	
	0 説明が5行未満である	結論と内容の密着性 ※2 3・2・1	

※1 写真についての説明に限定化されず、広く阿賀町の社会課題や阿賀町全体の雰囲気への言及のレベルで評価する

※2 最終段落が「また行きたい」「魅力を知ってほしい」など取ってつけたようなまとめではなく、主張との関連性のレベルで評価する